

三木先生のご退官によせて

お茶大の3年生の時、『宇治拾遺物語』を教えていただいたのが三木先生との最初の出会いでした。最初のご講義は昭和〇年4月26日で、比叡山の稚児が満開の桜の下で泣いているという『宇治拾遺物語』の有名な話でした。三木先生のご講義を聞いていると満開の桜の花の下で泣いている稚児が目に浮かび、物語の世界に入り込んでいくようで、私たちはたちまち「中世三木ワールド」の虜になりました。今、その当時のノートを見ると先生がどれほどレベルの高いご講義をしてくださっていたのかが分かり、未熟な学生であった私は申し訳ない気持ちでいっぱいになります。

その後も学外の講座に潜り込んで、『方丈記』などの中世文学を三木先生に教えていただいたりしました。再び大学に戻ったときには指導教官にもなっていただきました。私は修論では終助詞の研究をしましたが、先生のご専門やご関心からはほど遠い分野であったにもかかわらず、お時間をとっていただき丁寧なコメントをいただきました。先生のお部屋はご本がいっぱいドアをノックするとそのご本の隙間をくぐり抜けて先生がお顔を出してくださいました。そして「まあ、どうぞ」とお部屋に招き入れてくださり、席を勧めてくださるのですが、座る場所もないほどのご本の山でした。

先生は中世文学の押しも押されもせぬ大家でありながら、ご趣味も幅広く気さくな方です。先生がスポーツマンでいらしたことや中島みゆきの熱烈なファンでいらしゃることを知ったときには、正直ちょっとびっくりいたしました。また大の映画好きでいらして、映画の話でもとてもかかないませんでした。私も含めて先生からビデオをお借りしたことのある学生は何人もいたことでしょう。

先生には現在の日本語教育コースの主任もしていただきました。国文科の会議や他の会議とのかけもちで先生が大急ぎで文教2号館前を歩いていらっしゃるお姿を何度もお見かけしました。

これだけの紙面では書き尽くせないほどたくさんの思い出があり、学生としてまた同じ職場で仕事をする者として先生には本当にお世話になりました。先生のますますのご活躍をお祈りしてご退官によせる言葉としたいと思います。

佐々木泰子